

真宗門徒にとっての一年のはじまり

十月二十四日（月曜日）、宗祖親鸞聖人のご命日法要である報恩講が勤修されました。

前日早朝より同朋会有志の方々清掃やお荘嚴の飾りつけ、配布物の作成などの準備にきてくださいました。毎年のことながら、ときはきと手際よく準備が進み、あつという間に報恩講お迎えのしつらえが完成しました。

当日は穏やかな秋晴れ。報恩講は真宗門徒にとって一年の始まりであると言われるますがその言葉にふさわしく厳肅な雰囲気なのか、報恩講用のお勤め「正信偈真四句目下」が勤まりました。

法話は三年目となりました若林区浄澤寺御住職小野和徳師。昨年は「私たちは過去への後悔と未来への不安の中に生きていて今を生きていることがとても難しい」とお話しいただきましたがその続きとも言えるご法話でした。

コロナ禍でお斎（お食事）の再開が難しく、その分あつさりとした法要になっていることは否めませんがどんな状況であつても、その時々にあわせて教えを聞く場を開いていく、教えに耳を傾けていくということを深く確認した報恩講でした。

徳泉寺 報恩講 勤修

徳とく泉すい報ほう

No. 6 0

発行

令和4年10月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区

榴岡3-10-3

(022)297-4248

tokusenji.sendai@gmail.com

[ai@gmail.com](mailto:tokusenji.sendai@gmail.com)



ホームページ

tokusenji-sendai.com



Instagram

[tokusenji.sendai](https://www.instagram.com/tokusenji.sendai)



TOKUSENJI.SENDAI

法話 小野和徳 師（若林区浄澤寺住職）

「罪福心を抱えて生きる」《一部抜粋》

罪福信する行者には 仏智の不思議をうたがひて 疑城胎宮に留まれば 三玉にはなれたてまつる（正像末和讃）

私たちが心に必ず抱えているものに「罪福心」があります。罪福心とは自分に都合の良いことを求め、悪いことは排除しようとする心です。この罪福心、自分の心からなくすことができればいいのですが、生活から離れ厳しい修行をしても尚、そんなことはなかなかできません。ましてや私たち日常生活を送るものはこの罪福心から逃れることはできない、と考えられます。良いことがあれば有頂天になり、嫌なことはばかりがやってくれば失望の淵に立ちます。これは自分の人生、自分でコントロールできる、と思っているからおこるのですが、実際には思い通りになりません。

親鸞聖人は罪福心をなくすことはできませんよ、と私たちに教えてくださいます。私は罪福心を持っているのだ、と気づかせてくれるのが仏の教えである、と。罪福を尽くしながら日常生活を送る私たちに、罪福を尽くしながら、仏教との出遇いを通して生活していくことができる、こんな私があつたのだ、と自分自身に驚かされる、気づかされるといふことがある。そこに浄土真宗が開かれた意味があるのではないかと思うのです。